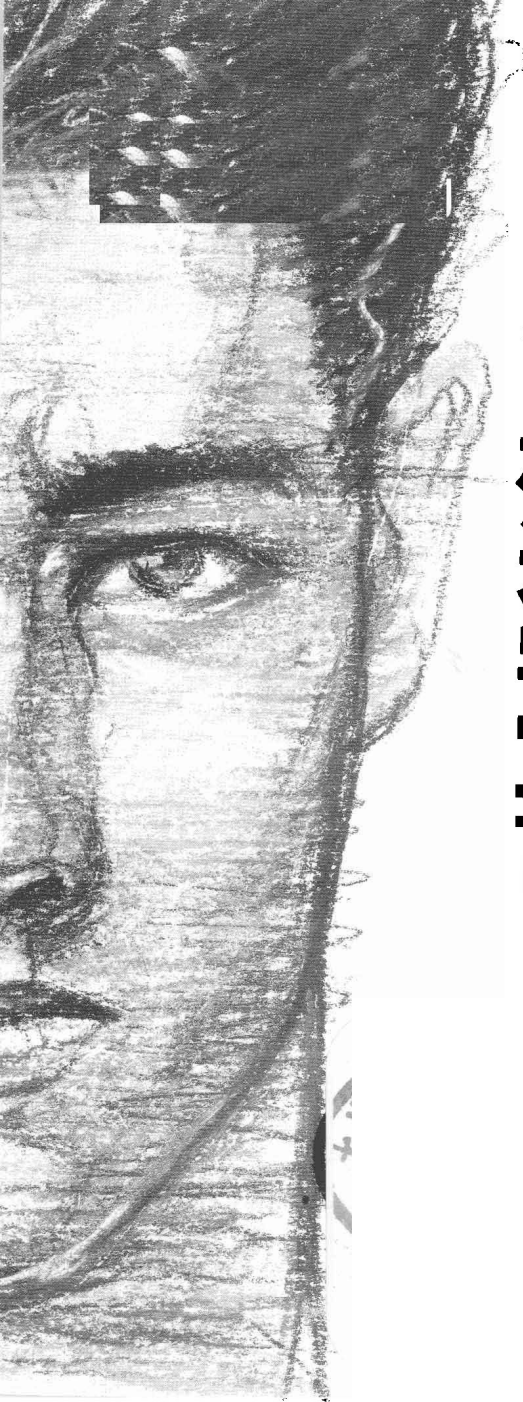




ブーイター
ぼくの
外山恒二
高校退学宣言

徳間書店



ブレイク
ブレイク
ブレイク
ぼくの
外山恒二
高校退学宣言

HAPPY XMAS (WAR IS OVER)

by JOHN LENNON/YOKO ONO 山本安見訳詞

© 1971 by LENONO MUSIC/ONO MUSIC

The rights for Japan assigned to FUJIPACIFIC MUSIC INC.

「未来は僕らの手の中に」真島昌利作詞

(日本音楽著作権協会(出)許諾第8872076-801号)

グッドバイ・ハイスクール
ぼくの高校退学宣言

著 者	外山恒一
発行者	荒井 修
発行所	株式会社 徳間書店 〒105-55 東京都港区新橋4-10-1 電話(03)433-6231(代) 振替 東京4-44392
	〈編集担当 呉地和夫〉
印刷所	株式会社廣済堂
製本所	株式会社廣済堂

© Kouichi Toyama 1989, Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-19-553849-1

ほんとね、ここに、ぼくはこの本を出すことによって退学処分を受けることを覚悟している、ってなことを書くこうしてたんです。

なぜ退学になるかって？ 決まってるじゃないですか。だって学校の悪口を書くんだもん。今の学校はそんなこと許しませんよ。新聞部がちょっと学校を皮肉った記事を書こうとすると、発禁処分になってしまうのが今の学校なんです。こんな大々的な本で、公に悪口雑言ぶちまけたら、退学になるに決まってる。たぶん、本を出す、というだけで退学、少なくとも無期停学でしょう。今の学校は生徒が学校の勉強に関係のないことをするのを、悪、と見るのです。当局者がそう云ってるのを録音したんですから間違いありません。

では、なぜ退学を覚悟する、って書かないかつつと、いや、じつはもうやめちゃったんです。こっちから。いやになっちゃってね。

一流進学校だったんですよ。今回の大学入試の九州大学合格者数は全国一です。でも、あんな高校、行きたくありません。いやなんです。あそこでは「教育」は行われてません。あるのは「教育」という言葉と、思想統制だけだったんです。あれなら、何もしてくれない方がよっぽど「教育的」ってなもんです。

ぼくだって、叛旗を翻そうとしたんです。それも、特大の叛旗をね。

——学生、の政党をつくらうとしたんですよ。もっとも、潰されてしまいましたかね。

でも、あんまり腹が立ったんで、とにかくよくやその仲間が、いったいどんなことをしようとして、どんなことを〈学校〉にされたのか、全部知ってもらいたいです。

そりゃ、ぼくはまだ中途半端のガキで、右も左も分かつちやいないから、けっこうチグハグなこともやってしまいました。でも、自分なりに精一杯、〈学校〉に歯向かって行っただけです。

たぶん、今のところ、負けてるんですが。——完全に負けたわけじゃない。まだ、どうにかしたい、という意志がぼくらの内に残っている限り、完全に負けたわけじゃない。

まあ、そんなことはともかくとして、ぼくは福岡県立筑紫丘高校を中退しました。二年生終了時点で中退しましたが、筑紫丘には半年ちょっとしか在籍しませんでした。

その前は、鹿児島にいました。鹿児島県立加治木高校という地方の進学校に在籍していました。転校の理由？ 父親の転勤、といったことになってます、名目上は。ほんとのところは、面白くなくなったから転校したんです。そんなことができるのかって？ もちろん、できるからやっただけです。

もっと言えば、加治木高校にもちやうど一年間しか在籍していません。その前は、やっぱり福岡にいたんです。筑紫丘じゃありませんよ。私立中村学園三陽高校というところにいたんです。

正直云って、あまり評判のいいところじゃありません。ぼくらが高校に上がるときにできた新設校で、ぼくは、二次募集でここに入ったんです。

こんなわけで、ぼくはたった二年間のうちに、三つの高校に在籍したんです。——だって、おんなじ高校に三年間も通うなんて考えただけで息が詰まりませんか？ 面白い高校ならまだしも、今の高校みたいに、「いくら厳しくても、三年我慢すりゃ、晴れて自由の身になれるんだ」なんて、懲役三年の囚人、のようなこと云わせるようなところに、誰が好きこのんで三年も通ってられますか。

ぼくは三つ高校を移り、その三校でたたかに反抗し、そして今、大検に合格しました。

これから、ぼくのやってきたことを記します。特に、ぼくにとって最大の抵抗であった「政党結成計画」について記します。そして、いかに潰されたか、について。

第一章では、政党結成計画とはまったく関係のない話も出てきます。恋愛の話や受験の話です。ぼくの話、あなたがたが聞いてくれたとしても、自分とは違う世界のおかしな政治少年の身の上話と取られたくはないからです。ぼくだって、恋もし、受験に失敗したりなんかもする、あなたがたと同じ普通の人間であることを強調したいからです。そして、普通の人間が、何を体験して今のぼくになったのか、を知ってもらいたいからです。

では、どうか最後まで、お付き合いをお願いします。

よいね。

グッバイハイスクール ぼくの高校退学宣言

目次

入学・転校・再転校・退学・大検合格、充実の二年間——「まえがき」に代えて——
I

● 【第1章】余の生い立ち



1 余の幼少時代——10

2 余の小学生時代——16

3 余の西南学院中学時代——19

4 私立三陽高校に入学す——33

5 鹿児島県立加治木高校に県外転校す——41

6 余の加治木高校時代——61



【第2章】余は如何にして（ほんとの）自民党の総裁となりし乎



1 福岡県立筑紫丘高校に再転校——100

2 新党構想のあらまし 108

3 結党に参じたこりない面々 116

4 学校当局との最初の衝突 137

5 はやくも大量脱退者が！ 156

6 体勢建て直し 173

7 長野と広島から応答がきた 192

8 九州一周自転車宣伝旅行計画 201

● 第3章「ほんとの自民党」大遠征記

●
1 ハッピー・クリスマス！戦争は終わった 208

2 校長の召喚命令と二人きりの夜 221

3 管理する側の論理 228

4 大逃避行 240

【終章】余の高校退学宣言



1 余の長い冬休み

264

2 やいへ学校へぼくの反撃はこれからだ

280



高校中退は、逃げだろうか 「あとがき」に代えて

281



【呼びかけ】勇敢にも高校を中退したぼくから、全国の元氣のない中高生へ

285



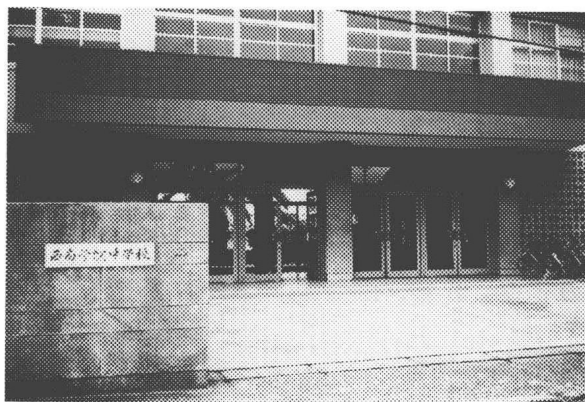
全国リスト

291

装幀——川畑博昭
装画——小松原英

余の生い立ち

【第1章】



西南学院中学校

1—余の幼少時代

一九七〇年七月二十六日 P M 11 : 59 生誕す

さて、「まえがき」にも書いたとおり、今からしばらく、ぼくが自分の過去を振り返って勝手に懐かしむのに付き合っていたかどうかというわけなんです。

鹿児島県国分市——つっても知ってる人は少ないだろうけど、国分市というのは、隼人町の隣りにあります。あ、こら、閉じるな。ちゃんと分かりやすく説明しよう。

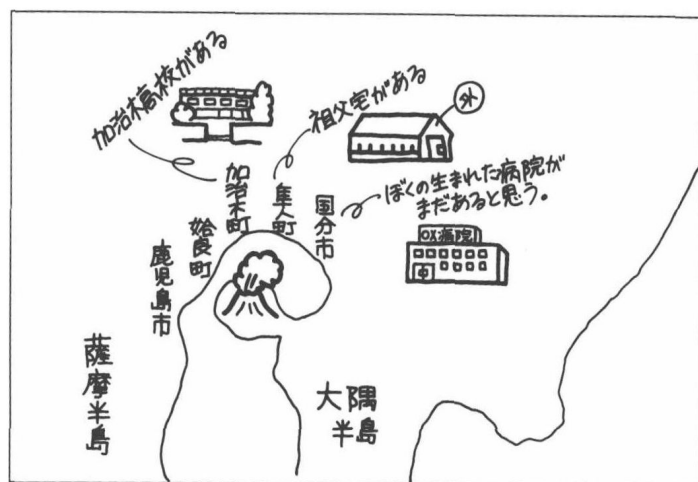
一 ページの地図を見てください。「国分市」と書いてありますね。はい、国分市はそこです。なんと鮮やかな説明。

で、ぼくの生まれた病院ってのがそこにあるんです。病院名までは知らん。

一九七〇年、つまり、「よど号」乗っとりとか、三島由紀夫事件があつた年だよな。この一九七〇年の七月二十六日、深更、ぼくが「おぎゃあ」と云ってこの世に生を享けたわけです。母が云うには、ぼくが「おぎゃあ」と云うと同時に、十二時の鐘が、じぼ・あん・じゃん！　じぼ・あん・じゃん！と鳴り始めたんだそうです。

ナルシストのぼくとしては、こんな話を聞くと、おお、何というドラマティックな誕生のシーンだろう、と思うのだけど、他人に云っても感動してもらえない。ま、いいさ。

それで、生まれた時のぼくってのがまた大きかったんだそうでした、今は、十七歳で一六五メートル



ル、もといセンチメートルの五十五キロという、現代高校生にしちゃあ小さいほうなんだけれども、生まれたときは四二〇〇グラムのジャンボベビーで、なかなか出てこなくて、しかたなく頭を引っ張ったら、生後しばらくは、「北斗の拳」でケンシロウに秘孔を突かれたときのように頭が変形してたらしいんです。写真がないのが幸いです。

「恒一」という名をいただきました。

字を他人に云うと、「恒久平和」の「恒」だとか、「恒星」の「恒」だから「自ら光り輝く」の意味なんだとか、いろいろ解釈していただくんですが、じつさいは、父の名が「久恒」で祖父の名が「一男」だから、という実に以て安直この上ない命名をしているんです。

ま、当人たちは、それなりの願いを込めて付けた名なんだろうと思いますが。

少なくとも、まさかこんな「問題児」に育てようとは、夢にも思っちゃいなかったことは確かだと思っています。

外山家という家の秘蔵子であった

ぼくは、祖父母にやたらめったら可愛がられて育ちました。

その理由としては、ひとつにはうちの家系のことが挙げられます。とゆーのも、父は七人姉弟で、その中で唯一の男だったんです。さらにぼくは、その父の長男として生まれました。こういった、じつに戦前的、封建的な点がひとつ。

もうひとつが、ぼくが、「もしかすると、こいつは特別な才能を秘めた子ではなからうか」と思わせるような点を持ち合わせていたこと。

と云ったところで大したことはありません。その辺を通る車の名前を片っ端から暗記していったとか、英語を喋ったとかいうこと。

特に後者は近所でも有名だったらしい。祖父が自慢して歩いたからなんです。

当時（たぶん二歳か三歳でしょうが）、ぼくは常に『ABCマイブック』とかなんとかいう本を携帯し、「どっぐ」だとか「きゃつ」とだとか口走ったと云います。殊に有名なのが、「えれくとりつく何たらかんたら（電気冷蔵庫、今は云えない）」という片仮名英語を口走ったことで、長い単語だけにその驚きは大きかったんでしょう。とにかく誰か客があるたびに何か云わせて自慢しよったそうです。しかし、平仮名片仮名が既に読めたというのは、もしかしたら他人より早いかもしれませんが。よう知らんが。

ああ、書き忘れていたようだけど、ぼくが住んでいた祖父の家は、隼人町にあるんです。隼人町というのは加治木町の隣りで……まあ、地図を見といてください。隼人塚という、知ってる人は知ってる



有名な史跡（らしい）があるところです。祖父宅は単人塚のすぐ近くです。

で、隣りの加治木町が、母方の実家があるところ
です。母方の祖父は戦争で死んでます。祖母の方は
たいへん元気な人です。今も健在で、日夜ゲートボ
ールに励んでいます。今も加治木に住んでいて、部
屋には天皇家の写真が飾ってあります。ぼくがそれ
を見て、天皇さんの悪口を云うと、「お前は日本人
じゃない」と云います。今も、すっかり問題児に育
ってしまったぼくの悪口ばかり云います。困ったも
のです。

妹はぼくより二つ年下だから、たぶんぼくが二歳
の時に生まれました（当たりまえか）。加治木の病
院で生まれました。こやつは小さいころから生意気
でミーハーで助平なやつで、ぼくが優しく彼女の頭
の上から芝生の芝をぶっかけて泣かしてあげた写真
が残っています。今、中学を卒業したところですが、
いまだに芸能界に憧れるミーハー娘です。

ぼくと妹は鹿児島生まれなので、福岡へ来てから

も家の中では鹿児島訛りで喋っています。今でもそうです。おかげで、福岡で生まれ育ち、鹿児島には住んだこともない五つ年下の弟も、家の中では鹿児島アクセントで喋り、友だちにバカにされています。あわれなやつです。

そんなことは、どうでもよろしい。

とにかく、外山家の跡取りとして生まれた上に、物覚えの良かったぼくは、父母よりも祖父母に甘やかされ、なついて育ちます。

ただ、それだけに、危ない遊びや悪い遊びを覚えなかったのが、生真面目な子供としてしばらくは育つのに役だったかもしれません。

祖父の死

そんな祖父が死んだのが、ぼくがたしか五つの頃でした。

そのころは、すでに福岡県大野城市というところに移り住んでいました。

父の仕事の関係です。

大野城市の場所については、一三ページの地図を見てください。日本史にちょっとだけ名前が出てきます。大野城という古い城跡があるんです。福岡市や太宰府市の近くにある市です。

まあ、とにかくぼくらの家族（父、母、ぼく、妹）は、こっちへ引っ越して来たわけです。

四歳の春、近くの乙金保育園に妹と一緒に入りました。母もパートに出たからです。

十二月の半ばだったと思うけど、祖父が倒れたって連絡があって、急遽、一家帰省しました。

——つい最近、というのは、ぼくが政治活動をやって、停学の憂き目をみているとき、祖母から、